

V 高等部の実践

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

V 高等部の実践

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

1. はじめに	67
2. 事例	
(1) 対象生徒の実態	67
① 普段の様子	
② 拡大中核的評価指標	
③ 本人・保護者の願い	
(2) 大目標設定について	68
① 願いの分析	
② 教師の問題意識	
③ 大目標の設定	
(3) 目標達成のための構造図	69
(4) 実践の経過	71
(5) 事例のまとめ	77
3. まとめ	79

V. 高等部の実践

1. はじめに

高等部のテーマは、昨年度から継続して「生徒の『なりたい自分』を支援する取り組み」にした。昨年度取り上げた事例生徒についての検討を深めることから、さらに高等部全体の指導のあり方、進路を考えていくにあたり私たちができることは何なのかを模索し、生徒の自己実現に向けて取り組みたいと考えた。

2. 事例

(1) 対象生徒の実態

① 普段の様子

対象生徒 A 男は、高等部 2 年生である。中学校は市内の通常学級に在籍し、高等部より本校に入学してきた。真面目で素直な性格である。1 年当初は、苦手なことを避けたり物事を心配しすぎることもあったが、次第に積極的な面も出てきており、卒業後に企業で就労する意欲も高まってきている。課外活動は陸上クラブに所属し、毎日放課後の練習に熱心に参加し、校外で開催される陸上競技大会にも参加している。登下校は自転車通学、雨天時は路線バスを利用している。

② 拡大中核的評価指標

中分類チェックリストを用いて A 男の全体像の実態把握を試みた。その結果を以下にまとめた。

セルフケア 運動・移動	・ 身の自立ができている ・ 身体的にはいろいろな活動が可能である
学習と知識の応用	・ 指示理解や模倣、簡単な読み書き計算ができる ・ 知識の応用に関しては部分的に制限がある
コミュニケーション	・ 適切に対応していない場合がある
家庭生活 主要な生活領域（教育・仕事・経済）	・ 経験が少ない

これらのことから、基礎的な学習は習得しているが応用力に乏しいこと、家庭では手伝い程度の家事はするが本人が主体になって生活は行っていないこと、年齢的に当然ではあるがお金を介する仕事の経験はないことが読み取れた。A 男に関しては言葉での指示だけでもできることが多いので、応用力に乏しいことは今回の実態把握で改めて確認することができた。また、「運動・移動」での制限がないことは、A 男の最大のプラス面であると考えられた。つまり思考力や判断力の必要な活動に関しては支援が必要だが、体を使った活動に関しては特に制限がないといえるであろう。

③ 本人・保護者の願い

本人

元々最も興味があるのは、自動車である。自動車のメーカーや車種、エンジンの形式な

どもよく知っており、教師にもよく話しかけてくる。1年時の後期は自動車関係での産業現場等における実習（以下現場実習または実習と記す）を希望したが、自動車や関連企業での受け入れ先がなく、結局電機部品の基盤組み立ての会社で現場実習を行った。

1年時の終わり頃に、NHKのテレビ番組を見たことがきっかけとなり、農業に関心が深まったようである。不況で業績が厳しい自動車業界と比べ、「農業はもうかる（不況でも大丈夫）」と思ったようで、作業は菜園工房、現場実習も農業関係で行いたいとの希望を伝えてきた。

保護者

毎年4月の初めに「個別の指導計画作成に関する調査」として、日常生活・学習・進路・健康・社会性・余暇・卒業後の生活・その他の8項目について、本人及び保護者に希望や願いを記入してもらっている。

A男の保護者からは、1年時には進路に関して「何が出来るのか、何に向いているのかいろいろな可能性を見てほしい。ぜひ就職して欲しい。」という願いが出ていた。2年時には「菜園（作業学習）が楽しいそうで今は農業に関心が向いている」と現在の様子を記入しつつも、「適性に関しての助言が欲しい」「関心の持てる作業を見つけない」「一般就労させたい」と進路に関しての願いの記述があった。さらに、卒業後の生活全般に関して「先輩方の卒業後の様子が知りたい」「グループホームなどの情報が知りたい」という願いの記述もあった。

（2）大目標設定について

① 願いの分析

まず現在のA男の望みに沿って、「農業での就労を目指す」と大目標を立ててみた。A男は、農業での就労を目指すと言うが、彼の考える「農業」とは、どのようなものであろうか。

菜園工房での作業分野は農業であるが、高等部の担当する畑は約70m²の小規模なものである。「菜園工房の仕事は楽しい。」と話すけれど、天候の関係もあり、まだ集中して作業したことはなかった。またNHKのテレビ番組で彼が見たものも、部分的でしかないように思われた。

そこで農業をどんな仕事だと思うか、と本人に訊ねてみたところ、

- ・野菜やお米を作る仕事
- ・土寄せ、追肥、畝作り、水やり、土壌改良、除草、粗起こし、害虫駆除など
- ・5、6月が忙しい仕事である。収穫の時期も忙しい。

などの答えが返ってきた。菜園工房での作業や現場実習によって得た知識がかなりあるものの、彼が就労を考える「農業」はまだ一部であり、自分自身が働く場としての意識までにはなっていないようである。

「農業での就労を目指す」という目標を立て、生活機能モデルを用いて協議をしていったのだが、研究を進めるにつれ、ほんとうに農業が彼にふさわしい進路先と決めてしまっただけなのか疑問が出てきた。

② 教師の問題意識

6月に行われた前期現場実習の後、A男は担任と彼との面談で次のようなことを話した。

- ・本当は整備士みたいな仕事をしたいのだが、勉強しなくてはならないし、難しそうである。部品の会社なら大丈夫かもしれない。
- ・(他の実習生が作業をしているビデオを見て)スーパーの仕事ならやってもいいと思った。
- ・もし賃金が高いとしても、掃除の仕事はやりたくない。
- ・お菓子屋さんの仕事はしてもいい。
- ・作業所だと、月 5000 円くらいしかもらえないと母から聞いた。それでは生活できない。電気代や税金とか払うためには、月 7 万円くらいは欲しい。

現場実習を通して、また他生徒の実習のビデオを見ること等により、やりたくない職種も少し見えるなど、彼の進路に向けての意識はやや高まってきた。しかし、彼から出てくる職種や仕事に関する言葉は、解釈や理解の仕方が不十分な面もあり、私たちが常識として持っているものとは違うものであることも話していくうちにわかってきた。彼のほんとうの思いを知るためには、彼の話す言葉からだけでは理解できない。揺れ動く A 男の願いや思いを受け止め支援することが必要である。

③大目標の設定

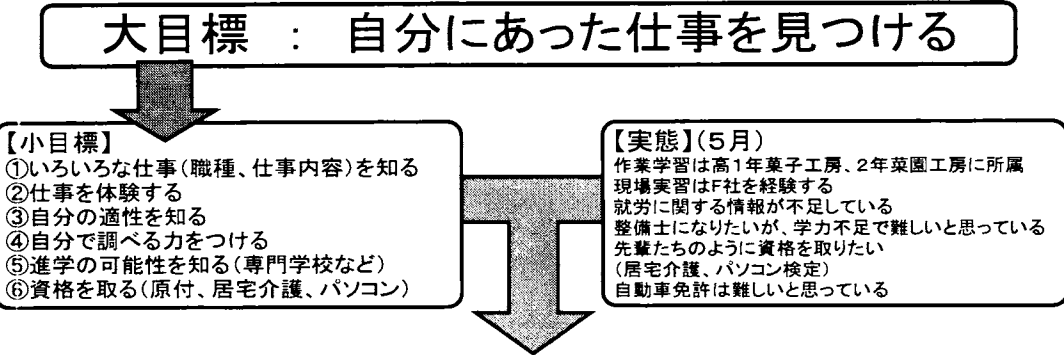
結局のところ、A 男はほんとうになりたい自分の職業というものはまだ決めかねているのではないだろうか。世の中にどんな仕事があり、どんな内容なのか、知らないことも多い。

そこで、何か特定の職業を目指すというより、その前段階として、彼の職業選択の手助けとなるような支援を行うことが現在のところ必要であることを共通理解した。彼の現在の目標は、「自分にあった仕事を見つける」ことではないだろうか。

(3) 目標達成のための構造図

A 男の職業選択の手助けとなる活動として、私たちに何ができるかを考え、小目標を達成するための各授業、生活場面、またクラス等でできる具体的内容について議論した。A 男の活動性を上げるために彼が興味を示し意欲を持つ方向に広がるよう配慮した。この結果については、次の目標達成のための構造図に書かれた通りである。(図 V-1)

目標達成のための構造図



小目標を達成するために何をするか

①	1	他生徒の実習のビデオを見る
	2	職場見学をする
	3	先輩の話を聞く
	4	身近な人の話を聞く
②	1	作業学習
	2	現場実習
	3	現場実習以外の職業体験
③	1	OHBY(仕事発見テスト)
	2	職業評価を受ける
④	1	ハローワークへ行く
	2	求人情報に慣れる
⑤	1	専門学校、能力開発校のパンフレットを閲覧できるようにする
	2	オープンキャンパスに参加する
⑥	1	居宅介護従業者3級を取得する
	2	パソコン技能競技大会
	3	原動機付自転車免許取得に関する情報

教科	目 標	※ 小目標 No.	評 価 (12月)
日常生活の指導	身だしなみを整える		髪の手入れやネクタイのヨレを指摘されたとおすことができた
生 活	いろいろな職場を見学したり、職場のビデオを視聴したりする	①	次回の現場実習先の職種などの希望を考慮することができた
作業学習	効率的に仕事をしようとする	②	効率の良い他の生徒の仕事を見習って、たわし洗いの効率が良くなった
からだづくり	仕事に耐えられる筋力や体力を養う		意欲的にエクササイズに取り組めた
全校集会	グループのメンバーの確認をする		写真カードを使って人数を数えて確認ができた
部 集 会	ハローワークや資格・免許等の情報を得ることができる	⑤	興味のある情報に関しては進んで閲覧できるが、定期的に注意を促さないとその場限りになる傾向がある
国 語	自分の思いをまとめて伝える		意見を求められた時、考えて答えることができた
数 学	仕事につながる数量的知識や技能を身につける		デジタルスケールを使った計量ができる
音 楽	好きなジャンルの音楽を選ぶ		自分の好きな音楽メディアを持ってきて聞くことができた
情 報	ワードの表作成ができる	⑥	簡単な表の作成ができた
進 路	自分の適性に合った仕事を知る	③④	OHBYを使って自分の適性を知ることができた
く ら し	家事の体験を重ねる		野菜を切る、みそ汁を作るなど経験した
保健体育	仕事に耐えられる体力をつける		色々な運動に積極的に取り組むことができた
趣味学習(スポーツ)	簡単なルールを理解してゲームができる		リーダーとしてチームをまとめ、風船バレーのゲームを楽しむことができた
芸 術(音楽)	自信をもって歌や演奏できる機会をもつ		マイクを使用し、自信を持って発表できた
委 員 会(給食)	毎日の食材に関心を持つ		食材カードを食べ物の働きの三つに分けられるようになった
自立活動	目上の人に対する言葉づかいに気を付ける		目上の人への言葉づかいは知っているが、場に応じた言葉づかいができなかった
ほんもの学習	自分でバスの時刻やカラオケの料金を調べる	④	自分でバスの時刻や料金を調べることができた
挑戦学習(結ぶ)	新聞を束ねて縛ることができる		硬く縛ることを意識して取り組めた
現場実習	農業に関する仕事を体験する	①②③	農業分野の2カ所の実習先で実習し、農業について学ぶことができた

高等部では各教科について記載した。
評価は指導後に記入したものである。
※該当する小目標がある場合のみ該当する番号を記入した。

図 V-1

(4) 実践の経過

目標達成のための構造図に基づいて小目標を達成するための具体的な内容について行った活動及び経過を順に報告する。

小目標① いろいろな仕事を知る

①－1 他生徒の実習のビデオを見る

本校の高等部では、3年間で5カ所の現場実習を行うことができる。「自分にあった仕事を見つける」という大目標を設定したが、5回の現場実習では、多くの仕事がある中から、A男が自分にあった仕事を見つけることは難しい。

現場実習後に高等部全体で行われる現場実習報告会では、自分の体験を話すだけではなく、他生徒の実習の話をいろいろと聞いたり、そのビデオを見たりする。さらに、学級単位で行う「生活」の時間を利用して、クラスの同級生が取り組んでいる実習や、その仕事についての新しい知識や情報を得てほしいと考えた。現場実習期間中の「生活」の授業では、巡回指導中にクラスの友達の実習の様子を画像や映像で記録したものをしながら、A男は教員からの説明を聞いたり、分からないことを教員に質問したりして、仕事に関する知識を増やしていくことができた。

①－2 職場見学をする

「生活」の時間に、現場実習を見学するという計画をしてクラスで行った。実際に同級生が実習中の職場を見学することで、職場の雰囲気や従業員の方の様子など、画像や映像の視聴から得ることができない新しい学びがあると考えた。A男は、和菓子店、ドラッグストア、スーパーマーケットの3カ所を見学した。和菓子店では、饅頭作りが手作業ではなく大部分の工程が機械で行われていることを新しく知った。またスーパーマーケットでは、青果部門での商品作りを見学し、従業員の方に熱心に質問もしていた。目の前で、いろいろな野菜や果物の袋詰めをしたり、値段のラベルを貼ったりしたりしている友だちの様子や、他の従業員の仕事の様子を見ることができた。このスーパーマーケットの見学により、今度は実習をしてみたいという希望を持つようになった。

①－3 先輩の話を聞く

2月の進路の授業の中で実際に数名の先輩を招いて、どんな仕事をしているか、その仕事に就労するまでの経過等を、仕事をしている様子を写したビデオを見ながら話してもらう予定である。

①－4 身近な人の話を聞く

仕事について身近な人がどのような仕事をしているのか知るために、作成した仕事調べシートを使って、直接父親に、仕事の内容、必要な資格・免許、職業志望の動機、仕事のやりがいや苦勞などについて、いろいろと聞いてみた。

小目標② 仕事を体験する

②－1 作業学習

本校高等部の作業学習は、菓子工房、菜園工房、ビーズ工房、バリ工房、陶工房の5つのグループで構成されている。自らの有用性を感じ、働くことへの自覚と意欲を高めることをねらいとして、週9時間、通年で行い、基本的には3年間で3つの工房を経験する。

A男は、1年時は菓子工房に所属し、2年時は、希望を担任に伝え、菜園工房に所属した。

〈菜園工房〉

A男の所属する菜園工房は、ジャガイモ、里イモ、玉ネギ、長ネギ、大根、ニンジンなどの根菜を中心とした野菜を栽培している。農業に興味を持ち始めていたA男は、4月初から、野菜や道具の名前を1週間で覚えるなど、意欲的に活動している。

A男への働きかけとしてまず始めに取り組んだことは、農業に関する知識や技術を学べる環境づくりであった。菜園工房には、青空の下で土に触れ、一緒に汗を流し育てた野菜が生長する様子を間近で感じながら、お互いのことを気軽に話し合える雰囲気がある。最近思っていることについての会話の中で、A男は祖母が畑を借りて野菜を栽培していることを思い出した。そして、次第に自宅の庭を学校の畑のように耕して畑を作りたいと考えるようになっていった。この思いが強くなり、家族に相談したところ、プランターでの栽培ならと許可を得て、家庭菜園の取り組みが始まった。ここに家族の協力の下、自分の力で野菜を育てるという活動の機会を得た。A男は自分の育てたい野菜や、育てやすい野菜を教師に何度も相談した。自分で植えてみると生育が思わしくなく、どんな肥料を買えばよいのか、追肥の施し方はどのようにすればよいのか、我が家のトマトはなぜ赤くならないのか等の疑問が湧いた。学校で教師に質問をして1つずつ疑問を解決していくうちに、学習が強化され栽培に関する基礎的な知識や技術の幅が広がり、農業への関心も高まってきたようである。5月には、耕運機で畑を耕す模範を見せたところ、A男は僕も是非やってみたくと熱意を示し、教師の支援の下で耕運機を使う経験をした。

A男に訪れた次の変化は、6月の現場実習（②－2現場実習の項で後述）の後に行った振り返りの時間で、自己の能力を再認識したことによるものであった。普段から作業や家庭菜園で分からなかったことについて話す機会を持っているが、現場実習後は感じたことや思ったことをみんなで話し合い、特に内容の濃い話となる。A男は前期現場実習で膨大な数のトレイ（育苗箱）を洗う作業の中で、教師のヒントから作業効率が上がるコツを学んだ。学校に戻り他の生徒と話をするうちに、他の生徒に比べて自分には根気はあるが作業効率は良くないという自己認識が生まれた。この自己認識を持ったことで、その後の作業においては、どうしたらその子のように早く仕事ができるようになるのかと考えるようになり、常に作業効率を意識した行動が出来るようになってきた。その背景には、早くできたときに褒められたことがうれしくて、頑張ろうという気持ちになることも影響しているように感じる。

A男の農業的な事柄への知識欲の高まりという内面の変化は、学校や家庭での活動性の向上や、人的・物的な変化を生んだ。作業学習や家庭菜園での日々の積み重ね、現場実習や農業体験（②－3現場実習以外の職業体験の項で後述）などで、少しずつではあるが着実に知識や経験を積み、農業への魅力が増してきているA男は、10月の後期現場実習後にその思いをさらに強くしたようである。12月に行った意識調査アンケートでは、農業の仕事に就きたいという望みが第一希望となっている。

〈他の作業を体験する（陶工房）〉

A男についての作業面についての能力や個性をさらに知るため、また彼の作業体験を増やすためにも、他の作業を体験することを考えた。1年時に菓子工房を経験しているので、

今回はまず陶工房での体験を行うこととした。

陶工房では、計量した粘土をたたき板とめん棒で薄く伸ばしていき、きれいに均一の厚さになったところで型紙に合わせて切り、皿に作り上げていく作業を主に行っている。

A男は陶工房の作業場所へ初めて入ってきた時、きちんと「先生、よろしくお願いします。」と挨拶をした。皿作りに対してもとても意欲が感じられた。しかし、いざ作業を始めると、粘土をサイコロ型に形作ることや薄く伸ばしていくところでうまくできず、自分ではできたつもりで教師に報告するが、なかなか合格をもらえなかった。その日、同じく初めて陶工房の作業を経験する中学3年の体験入学の女生徒もいたのだが、彼女が完成しても、A男は皿を完成できず、かなり教師が手伝ってようやく皿の形になった。手先は決して器用ではない。「こんなに難しいとは思わなかった。簡単にできると思っていたのに。」と彼は素直な感想を漏らしていた。皆より少し片づけも遅れ、終業時間が遅くなってしまったが、不満気な表情を見せることもなく、時間内に書けなかった作業日誌も、翌日提出するように伝え、終礼の前に自分から持ってくる事ができた。

2回目の体験では、1回目よりも少し要領は良くなってきたものの、まだ1人で皿を完成することはできなかった。計量した粘土を、たたき板を使いながら順に薄く伸ばしていく工程にはコツが必要で、彼はなかなか体得できなかった。自分ではできたつもりで「できました。」と報告しても、まだ平らに伸びておらず、再び続行することとなる。なかなか合格をもらえない状態であったが、「今度こそは合格をもらおうぞ。」と意欲は失わなかった。結局、4回目の作業体験において、ほぼ1人で皿の制作を行うことができるようになり、陶工房の作業体験は一応終了とした。

終了後、現場実習における企業側が記載する評価表と同じものを使用し、作業を様々な側面から評価した。作業遂行に必要な体力、素直さについては評価が高いが、言葉遣いがぞんざいになりがちであり、正確さ、効率、持続力についても評価が低かった。これらは今後の課題であろう。

②－2 現場実習

本校高等部では、1年時に1回、2年時に2回、3年時に2回、計5回の現場実習を実施している。現場実習前には作業面、生活面の目標を生徒自身が設定し、実習壮行会を経て臨んでいる。事後学習の後、現場実習報告会を行っている。

A男の初めての現場実習（5日間）は、1年時にF社で電気部品の組み立てを行った。当初は自動車関係での実習先を希望していたが、受け入れ先がなかった。自動車部品のハーネス作りと共通した組み立て作業ができるF社を含め、実習先を5カ所提案したところ、A男はF社での実習を行うことを選択した。F社では電動ドライバーを使ってビス止めを行った。間違った作業手順によるミスもあったが、その後は作業手順を覚えて細かい作業に集中して取り組むことができた。次の現場実習では他の作業種も経験したい様子であった。



写真V－1.F社での実習

2年時には、農業に強い関心を示していたことも

あり、前期現場実習（5日間）の実習先として農業関係のB社を希望した。B社は、米や野菜作り、漬け物などの各種加工品製造も手がける会社である。6月という時期で、B社では主にトレイ洗いをを行った。田植え後のトレイ（米の育苗箱）が膨大にあり、ブラシと苗箱洗浄機を使いながらトレイに絡まっている根っこや泥を取り除いた。午前9時から午後4時まで、1日に300～400枚程のトレイをひたすら洗い続けた。かがんだ姿勢での作業で体力的にも辛い部分があったように思うが、関心の強い農業分野での実習とあって、天候が悪い日も根気よく取り組んでいた。実習中は巡回指導中の教員から作業するポイントを聞きながら、効率よく作業することができるようになった。他には、ナスの肥料やりも少し経験できたようであった。



写真V-2.B社での実習

前期現場実習後には、いろいろな仕事を知りたいということで、スーパーマーケットや運搬の業務にも関心を示していたA男であったが、後期現場実習でも農業分野での実習先を希望した。数ある農業の仕事がある中、トレイ洗い以外のことも学びたいということであった。



写真V-3.農業センターでの実習

金沢市農業センターでの後期現場実習（5日間）は、10月という収穫期であったので、太きゅうり、金時草、源助大根、ミニトマトなどいろいろな野菜の収穫や、市場に出荷するための検品や計量、梱包作業にも取り組むことができた。収穫できる状態か一つ一つ自分で判断しながらの収穫作業であったため、他の従業員より時間を要したが、責任を持って与えられた仕事に臨むことができたように思う。また実習最終日には、家庭で上手く育てることができなかった野菜もあったことから、野菜を病気や冬の寒さから守る方法などを質問して、野菜作りに関する知識を得ているようであった。

②-3 現場実習以外の職業体験 〈いしかわ農業人材センター〉

A男の農業に対する関心の高まりを受け、その後の本人を取り巻く環境への働きかけについて教師間で話し合った。その結果、農業に対する実際のイメージを広げるための、校外での学びの場が必要ではないかという結論に至った。

8月に担任が保護者に、財団法人「いしかわ農業人材機構」が開催する農業体験「いしかわの農業学ぼうコース」の情報を提供したところ、すぐに親子で参加を申し込んだ。その圃場は、畑作と酪農の大規模農家による営農が行われている河北潟干拓地（耕地面積1,071ha）の一画にある。学校の畑は小規模であるが、大規模な集团的農地の一画で大根の種まきや間引き、収穫を行うこの体験に参加したことで、農家の圃場規模に対するイメ

ージが少し膨らんだようである。また、「いしかわ農業人材機構」では、農家と求職者との橋渡しも行っているが、その相談にも興味を示している。

〈友愛ショップ体験〉

社会福祉法人「金沢手をつなぐ親の会」は金沢駅等に「友愛ショップ」という、作業所などの製品を販売するショップを展開している。今年 10 月のリニューアルに合わせて、販売体験参加へのオファーを受けた。毎週火曜日から金曜日までの 4 日間、10 時から 15 時まで販売体験を行うものである。高等部では、体験を希望する生徒を対象に当番を組んで参加することにした。A 男も希望を出し 11 月 17 日から 20 日まで販売体験に参加した。受け入れ先の評価は非常に良く、客に対しても笑顔で接していたそうである。友愛ショップから提案された仕事内容に加えて、実施されなかったが自ら「レジ打ちもしたい」と申し出るなど意欲的に取り組むことができた。

〈金沢大学清掃体験〉

金沢大学では、3 年前から障害者と専任ジョブコーチを雇用して、構内の清掃を行っている。その際に本校の当時の進路担当者が協力したり、現在就労している 6 人中 3 人は本校の卒業生だったりするなど、関わりは深い。A 男の職業観を育てるために、卒業生に混じって清掃の仕事を体験させてもらえるよう大学にお願いした。A 男に活動の主旨を説明して本人の気持ちを聞いたところ「いろいろな仕事を経験してみたいのです」と答えたので、1 月下旬に実施することとした。

小目標③ 自分の適性を知る

③—1 OHBY テスト（仕事発見テスト）

進路学習で自分の適性や自分に合った仕事を探す目的でパソコンソフト『職業ハンドブック OHBY』の「仕事発見テスト」を実施した。そのソフトは自分の興味や能力をチェックし、自分に合った職業を探し出すことができるものである。

A 男は興味を持って取り組み、他の生徒より先に意欲的にどんどん進んでいった。

その中からはじめて見る職業に興味を示し、更に詳しい情報を探っていった。目新しい職業に引き込まれていく様子であった。このソフトは映像や写真が多く取り入れられていることもあり、わかりやすく丁寧な内容である。初めて聞く職種や専門知識が要る職業について知る機会となったと思われる。

③—2 職業評価を受ける

職業能力をより客観的に把握するために、石川障害者職業センターで 3 年時の 7 月頃に受ける予定である。その結果を得て本人の適性理解につなげたい。また卒業後の円滑な就職や職業生活への移行にも役立てたい。

小目標④ 自分で調べる力をつける

④—1 ハローワークへ行く

校外学習として公共交通手段を利用してハローワークを訪れハローワークの場所や利用方法をハローワークの職員の方から説明を受けて学んだ。またナビの使用方法的説明を受け、求人情報を自分の力で探すことができた。実際に職を探している大勢の方に混じってその雰囲気をつかむことができた。

④－２ 求人情報に慣れる

就労につながる職場を探す際の最も有効な情報源はハローワークで得られることが多い。在学中は進路担当教諭が複数の求人情報から生徒に合った職業を選択して提案してくれるが、生徒自身が興味を持って求人情報を閲覧できるようになれば選択肢を広げられるようになるかもしれない。そこで、高等部の階段の上がり口の壁面に、ホワイトボードを置いて、「ハローワークのお知らせ」として求人票を貼るスペースを設けた。特にその求人情報から現場実習につながった生徒がいる場合には、より身近に感じられるのではないかと考えてその生徒名も同時に記すようにした。また、求人票を貼っておくだけでは生徒は興味を示さないと考え、水曜日の２限目に委員会と隔週で行っている高等部集会で、「進路情報」の項目を設けて情報の更新もしていくことにした。今のところＡ男も含めて興味を示す生徒はあまりいない。

小目標⑤ 進学の可能性を知る

⑤－１ 専門学校、能力開発校のパンフレットを閲覧できるようにする

高等部の階段の上がり口には、定期購読している金沢の情報誌を入れた書架が置いてあり、生徒が自由に閲覧できる娯楽的なスペースになっていた。今回そのスペースのより有効な活用を目指して、書架の半分を進路情報のコーナーにした。書架の段毎に「資格をとろう」「進学しよう」「仕事を探そう」というポップをつけて、生徒にも視覚的に内容がわかるようにした。「進学しよう」の段には、能力開発校や専門学校のパンフレットを置いてこれも自由に閲覧できるようにし、さらに高等部集会でパンフレットを使って、Ａ男が以前なりたいと言っていた自動車整備士の勉強ができる「自動車工学科」の紹介をすると非常に興味を示し、部集会の後で書架に駆け寄り閲覧していた。



写真V－４ 進路情報コーナー

⑤－２ オープンキャンパスに参加する

父親との会話の中で専門学校の存在を知り、進路情報コーナーに備え付けのパンフレットを自ら閲覧していた。しかし、自分は専門学校に入学できるのか、勉強についていけるかという不安があった。そこで、市内専門学校の授業を体験したり、入試情報を聞いたりするという事で毎月行われている体験入学会に参加することを勧めている。

小目標⑥ 資格を取る

⑥－１ 居宅介護従業者３級を取得する

石川県社会福祉協議会では、毎年７月下旬から９月上旬にかけて「知的障害者居宅介護従業者養成研修」事業を開催している。本校では４年前から対象生徒に事業の案内をし、希望者については受講申込書を自ら書いて提出するよう奨励している。昨年度は３年生２人が居宅介護従業者３級の資格を取ることができた。その報告会をした時に、Ａ男から「僕も資格を取りたい」「来年は応募したい」という言葉を聞くことができた。

今年の７月、募集要項をＡ男に渡すとすぐに受講申込書を記入し持ってきた。夏休みを中心に１４日間の研修を受講しなければならなかったが、１日も休むことなく通い、９月中旬に居宅介護従業者３級の資格を取ることができた。

⑥ー２ パソコン技能競技大会

高１時、Ａ男は将来、自動車整備士になりたいと思っていた。整備士になるためには、資格が必要だという知識から、「資格」の取得にも関心を示していた。普通自動車の免許が欲しいようだった。１０月には市内で行われた雇用支援協会主催の「障害者技能競技大会特別支援学校の部」でパソコン操作の競技に参加した。Ａ男の参加は今年で２回目となるが、昨年８級に挑戦し上位に入賞、今年はワードの文章の入力や表作成の課題に意欲的に取り組み、大会では４級に挑戦した。今年の技能競技大会でエクセルを操作してのデータ入力の課題の存在を知り、１１月下旬よりエクセル操作の基礎を学んでいるところである。

一般的なパソコン検定の受検は漢字の読みの力も必要となるが、生徒が希望すれば視野に入れていきたいと考えている。

⑥ー３ 原動機付自転車免許取得に関する情報

「車の免許を取りたい」という願いを持ちながらも「親が免許を取るのは無理だと言う」と話すＡ男であるが、交通規則を遵守して自宅から学校まで自転車通学が来ている。一足飛びに自動車免許は難しいかもしれないが、その前段階として原動機付き自転車の免許が取れないかと考えて、進路情報コーナーの書架の「資格をとろう」の段に原動機付き自転車の免許取得のための教本を、置くようにしてみた。本人が希望する自動車免許の教本では無かったためか、Ａ男はあまり興味を示さなかったが、高等部３年の男子生徒と高等部１年の女子生徒が興味を示し閲覧しに来た。

（５）事例のまとめ

Ａ男の大目標を達成するために、いろいろな方面で教師の支援を行ってきた。その中で見られたＡ男の変化を生活機能モデルに適用して以下のようにまとめ、評価した。

活動と参加

- ・現場実習のビデオを見たり、実際に同級生が働いている職場に行ってその様子や仕事内容を見学することができた。また、友だちから実習後の感想を聞くことができた。
- ・作業学習では、プランターや土、種や苗などをホームセンターへ一緒に買いに行くことができた。固形の肥料から液体肥料をつくるできるようになった。道具の使い方や手入れの仕方が上達した。一人で畝作りができるようになった。農業に関する技術が向上した。
- ・作業学習での学習意欲が増して、作業効率を意識できるようになった。作業に関する質問が多くなり、農業で自分が学ぼうとすることのイメージが明確になってきた。また、覚えたことを家庭で実践できた。農業に関する知識が向上した。
- ・現場実習では農業についてのいろいろな作業を体験できた。後期の実習先は路線バスの便が良くなかったが、勤務時間に合わせてバスを乗り継いで行くことができた。
- ・学校だけでなく家庭でもプランターで作物を育てることができた。また、財団法人の主催する農業体験に参加できた。
- ・インターネットやガイドブックで仕事について調べることができた。
- ・居宅介護従業者３級の資格を取得した。パソコン技能競技大会に参加した。

環境因子

- ・教師の共通理解のもと「A男にあった仕事をみつける」という大目標を達成するために、いろいろな活動を授業の中で取り入れたり、学校外の活動への参加を奨励するなど、多方面から支援をした。物理的にも3時限の枠で設けた「生活」の授業を活用して、校外の職場見学に出かけた。
- ・A男が興味を示しそうな情報を提供すると、保護者がその活動に積極的に参加してくれた。また、A男の頑張りを評価して本人のやる気をくみ取って家庭菜園を行うなど、家庭の理解や協力が得られる良い環境であった。
- ・金沢の中心地に住んでいるので乗り継ぎのできるバス停が近くにあり、路線バスの便が悪い場所でも一人で通勤できた。保護者もバスの利用法を調べたり、通勤の練習を一緒に行うなど協力的であった。
- ・家庭菜園が、学校で習得した知識をさらに深める場になった。

個人因子

- ・希望した実習先では同じ仕事を1日続けたり、早起きをして遠距離を路線バスで乗り継いだりするなど、自分が「やりたい」と思ったことに対しては辛いことがあっても苦勞と思わず耐えられる。

主観的体験

- ・ビデオを見たり職場見学をしたりして、自分が経験していない作業について知ることができた。例えばお菓子は手で作っていると思っていたが、機械化されていることを知ることができた。また、友だちの仕事の様子を見てスーパーマーケットでも現場実習を試してみたいという気持ちがもてた。
- ・現場実習や作業学習の場を通して、根気はあるが作業効率が良くないことを自分で認識できたようで、「自分は（仕事が）遅いですか？」と聞いてきた。その後の作業学習では、どうしたら早く仕事ができるようになるのかと常に作業効率を意識した行動をしている。
- ・農業が好きになり、具体的な質問が増えるなど関心も強くなってきている。
- ・後期の現場実習では、市場に出る農作物に携わり、自分の収穫した物がスーパーなどで売られることを実感できた。自分の仕事が社会とつながっている事を知る体験となった。
- ・12月に行った意識調査アンケートでは、農業の仕事に就きたいという望みが第一希望となっている。なお、職業にしたい仕事の2番目は車の整備士、3番目はトラックの運転手であった。選んだ理由についての明確な説明があることから、現時点での職業選択ができており、新たな内面的変化が窺える。
- ・居宅介護従業者3級の資格を取ったことを喜びながらも「ホームヘルパーの仕事は、自分のやりたい仕事ではない」と自分の思いをはっきりと伝えた。また、友愛ショップの体験の後に「販売の仕事をしたと思うか」という質問に対しては、「微妙」と答えていた。いろいろな体験を通してA男なりに仕事に対する評価をし、自分にあっているかどうかについて知識が積み重なっていると思われる。

A男の「自分にあった仕事を見つけない」という願いを大目標に設定し、その目標に迫るスモールステップの6つの小目標に沿って実践を行ってきた。本人の活動性を上げるた

めにA男が「やってみたい」と言ったり、興味を示したりした方面に活動を広げるよう配慮した。できそうな活動を多数準備するあまり羅列的になってしまった感是否めないが、A男自身その中で自分がしてみたいものとそうでないものを選んでいたように思われる。

複数の経験を通して、彼の生活世界に対する知識が更新・拡大され、「自分は遅いですか?」と聞き始めるなど自分のできていない部分に気づく場面も見られた。自己認識が進んだことで、作業を初めとして学校での学習態度が変わったり、学校以外でも、家庭菜園を作ったり体験したり資格を取得しようとするなど、多方面でA男自身の活動性が向上した。

3 まとめ

今回の高等部の実践を通して私たちが学んだことは、大きく三つにまとめることができる。

私たちは、はじめ生徒から発せられた言葉をたよりに農業を目指そうとする彼を支援しようと考えた。しかし生活機能モデルを通して検討を進めていくうちに、農業だけに固定して目指すのではなく、もっと広く職業について学ぶことが必要であることに気づき、新しく大目標を設定し直し、様々な支援の方法を模索し実践を試みた。その中には、とても有効であったこともあれば、そうでないこともあった。しかし、高等部職員が共通意識を持ち、大目標の達成に向けて、それぞれの指導場面で速やかに取り組むことができた。これは一つの大きな成果である。

また、生活機能モデルを使うことは、保護者や本人のニーズを的確に把握し、客観的な判断ができる方策である。今回はある程度会話のできる生徒を事例とし、彼自身の気持ちを、アンケートや何回も話をする中で聞き取るようにした。彼は、その時々 of 正直な思いを話してくれた。しかし生徒が自分の気持ちや希望について述べる場合、彼らの言葉というものがどの程度の確に表現できているかを判断することは容易ではない。一つの言葉についての理解度や咀嚼度は、教師側と生徒とでは、ずれのある場合がある。質問が誘導的になってしまうこともある。また生徒は常に変化し成長していく。生活機能モデルや目標設定のための構造図を利用して、客観的で有効な評価をしていくことが大切ではないだろうか。

今回の大目標「自分にあった仕事を見つける」は、事例生徒だけでなく、高等部のかなりの生徒についてもあてはまる目標である。この目標に沿って考えた教育活動、例えばOHBYテスト、他作業の体験、身近な人たちに仕事の話を聞くこと、校外での職業体験など、その多くは他生徒にも活用できる。全体像を把握できていることで、教科やクラス毎の活動ではあっても、それぞれがつながり、生徒をグローバルに変容させることができたと言える。そしてこれらはまだ完全ではなく、今後はさらに、外部資源の活用、情報収集などを行うために、私たちが学ばなければならないことが多くある。

最後に、私たちはこの成果を今後は高等部の教育課程や個別指導計画に生かしていくことを共通理解している。私たちの取り組みはまだ短期間のものであり、成果と呼べるものに至ったかどうか疑問な点もある。今後も継続していくことによって、また他生徒にも活用することによって、さらに変化し、進化し続けていくものではないかと手ごたえを感じている。